

九州文化史研究所『事務記録』（昭和二十五年度） の紹介

梶嶋，政司
九州大学附属図書館記録資料館

<https://doi.org/10.15017/6787712>

出版情報：九州文化史研究所紀要. 66, pp.125-136, 2023-03-31. Manuscript Library, Historical Records Section, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



九州文化史研究所

『事務記録』（昭和二十五年度）の紹介

梶 嶋 政 司

一、一九五〇（昭和二三）年の九州文化史研究所と『事務記録』

九州文化史研究所は、一九三四（昭和九）年に九州帝国大学法文学部内に学内措置として設置が認められ、法・経・文の三科の関係教員が所員として共同運営を行なってきた。当研究所の研究活動は主に九州各地の史料蒐集であった。戦後一九四九（昭和二四）年四月一日に法文学部が法・経・文の三学部に分立して以降は、三学部による共同管理という法文学部以来の運営方法を踏襲して研究活動の強化が図られた。昭和二五年度に策定された当研究所の規定によれば文学部長をもって所長に充て、三学部の教授・助教授・専任講師のうち関係教員が所員に名を連ね、三学部の関係分野の助手と大学院特別研究生が研究員として研究活動に従事していた。⁽¹⁾

昭和二五年度の陣容を見ると次の通りである。所長の干潟龍祥（文学部長）以下、所員として楠本正継、森克己、喜多野精一、古野清人、竹内理三、福田良輔、杉浦庄二郎（以上文学部）、青山道夫、具島兼三郎、吉田道也（以上法学部）、岡橋保、田中定、宮本又次、高木暢哉（以上経済学部）が名を連ね、これに嘱託所員として文学部講師の檜垣元吉が加わっている。⁽²⁾この頃には研究員として、一九四七（昭和二三）一〇月に大学院特別研究生となつ

ていた服藤弘司、安藤精一、秀村選三の面々が在籍している。⁽³⁾

一九五〇（昭和二五）年の九州文化史研究所の出来事を見ると、研究面においては、四月二五日から五月七日にかけて文部省人文科学研究費補助金による対馬調査を実施し、その成果が『九州大学九州文化史研究所紀要』第一号（翌五一年三月に発刊）に発表された。こうした研究の活発化とともに、当研究所の学内予算措置は昭和二五年度に相当額が組まれた。そして翌昭和二六年度からは当研究所の予算が文部省予算として組まれることになる。⁽⁵⁾

こうして見てくると一九五〇（昭和二五）年という年が戦後の九州文化史研究所にとって一つの画期をなす年であったといえることができる。戦後の再出発をはたすことになったとも言えるべき重要な年に関連して、当研究所内で記された業務日誌が残っている。『事務記録』と題されたわずか七枚綴じの罫紙ではあるが、昭和二五年四月三日から昭和二六年二月一五日にかけての当研究所における日常的な業務内容が記録されている。必ずしも情報量は多いとは言えないこの記録には、対馬調査後に借用してきた史料を筆写する様子など研究所内における日々の業務内容が、事務職員の立場から記されている点において他に類することがない史料なのである。

『事務記録』の記載内容からいくつか紹介してみよう。史料の蒐集については、対馬の史料以外にも戦前以来九州文化史研究所の研究課題として重視していた近世日田に関する史料や、その他の記録の筆写が行われている。また、当時はじまっていた近世庶民史料調査の九州地区の調査状況に関する記事も散見することができる。嘱託所員の楢垣講師や研究員の安藤氏が近世庶民史料の調書を事務職員の北條・箱島両氏に渡すと、それを受け取った彼らが残業を厭わず控書写を作成した。こうしたエピソードからは、九州大学における近世庶民史料調査が、研究員（大学院特別研究生）や嘱託所員などの若手研究者を中心に組織され、九州文化史研究所のバックアップを受けながら推進されていたということをうかがい知ることができるのである。

五月一日に大蔵省事務官が当研究所を視察し、森克己、宮本又次、竹内理の三教授が「交々予算の増額其他について要求並ニ説明」したという記述は、翌年度からの文部省予算化に関連するものであり、当研究所の活動を主導していた森、宮本、竹内がこの機会を重要ととらえ対処していたとみることができよう。九州文化史研究所の創設に重要な役割を果たした長沼賢海元法文学部教授が長年にわたり筆写して蒐集した史料群を九州文化史研究所が受け入れることができたのもこの頃であった。

以下、本稿では一九五〇（昭和二五）年の九州文化史研究所『事務記録』の全文を翻刻する。

二、『事務記録』の翻刻

（凡例）

- 一、本史料は九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門が所蔵する『事務記録』を翻刻したものである。
- 一、原本は「九州大学文学部」の罫紙を用いて、日付、摘要事項、備考欄は横線で区切られているが、翻刻にあたって横線は省略した。
- 一、翻刻にあたっては、漢字の旧字体（正字体）は、一部の固有名詞を除き現行の字体に改めた。
- 一、読みやすさを考慮して、適宜読点と並列点を付した。
- 一、見せ消ちは「ゝ」で示し、修正がある場合はルビで該当の文字を示した。
- 一、人名については、九大関係者ならびに来訪者について文末注を付した。

（表紙）「九州大学文学部」罫紙を紙縫綴（縦25・7 cm×横18・8 cm）

九州文化史研究所
昭和二十五年四月
事務記録

（本文）

月日

摘要事項

備考

昭和二十五年

四・三日

宇佐文書書写終ル

〃 四日

宇佐文書并宇佐諸家文書計八冊、井上氏認⁽⁷⁾ノ礼状ヲ添エ本日法学部（大野氏）より發送返却す

〃 〃

日田文書 蠟座銀会所其他の筆写にかゝる

四・二二

宮本・森⁽⁸⁾岡教授来所、開学記念展覽会に出品すべき文書類を撰択せらる、

〃 二四

右出品目録一通、森先生に渡す

〃 〃

宇佐郡八幡村下乙女小野拓男氏より宇佐文書到着受取ツたとの通知が来た、借用証同封

〃 二五

安藤氏⁽¹⁰⁾より近世庶民史料調査報告ノ控書写（五月中）のこと依頼 三綴

五・一三 開学記念展覧会出品物ヲ医学部会場ニ運搬並ニ飾付 午後三時迄 北條^①、箱島^②
五・一四 開学記念展覧会

説明者、秀村^⑬ 安藤 監視監督等六時迄 箱島

五・一五 大蔵省事務官視察 森、宮本、竹内先生^⑭

交々予算の増額其他について要求並ニ説明

対馬（宗家、須河氏、賀島氏）の借入書類来る

庶民史料の控書写にかゝる

五・二二 右書写完了

五・二五 庶民史料の写ニかゝる 今日安藤氏持参 前分続

二六 長沼文庫の分、地図類（二六二―二六九）受取

二七（土）長沼文庫の残部の写本が来た。

六・一〇 庶民資料の報告の分筆者にかゝる

「三根村御吟味之口々書出張」一冊を返却すること、長崎縣上縣郡三根村田口氏に郵送ノ事

六・一三 火 庶民資料書写終了 秀村氏ニ渡す

六・一四 殆ど終日、長沼文庫の後の分整理、棚の引替等をなす

○長沼文庫の分製本を要するもの多数あり。

○低函中の文書類を取出したま、書棚に入れてゐるのは夫々係の人にて整理元の函に入れて

貰ふ事

六・一八（日曜）午後一時より地階俱樂部室で文化史研究所関係者一同打合会 四時半閉会

打合事項、近世庶民史料報告ニ関スル事、

史料探訪打合ノ件、研究室整理ニ関スル件々等々

出席者 森、宮本、竹内、吉田、⁽¹⁶⁾ 檜垣⁽¹⁷⁾の先生方

秀村、安藤、服藤⁽¹⁸⁾、箱嶋、 九人

茶菓代五〇〇円 森先生出、（先生方百円宛出）

北條氏ノ分ハ翌日渡ス 都合十人、（残金ナシ）

六・二二（木）

庶民史料報告書作製の為居残執務

北條 五時―七時 箱島 五―八時迄

六・二三（金）

午後檜垣先生庶民史料調書四十枚許持参

清書方依頼

居残執務

北條氏 五時―七時 箱島 五時―九時五分迄

六・二四（土）

残務居残

北條 午後一時―七時 箱島 後一時―七時

六・二五（日）

出勤執務

北條 午前八時―午後六時 箱島 八―五時

六・二六日（月）

庶民史料調査報告清書は今日午前中で大体終了 午後二時頃檜垣先生に渡す。

改めてまた日田文書の書写にかゝる。

六・二七

対馬文書⁽¹⁹⁾（武内先生借用の 一、御書付十四通一巻

一、御書付一通、一卷

一、久保山氏系図 一卷

以上文化史ノ名義にて仁位村字ハロウ久保山益城氏へ返却ノ件、安藤氏より依頼、

森教授ノ借用証をその際返してもらう事

武内先生⁽¹⁷⁾よりも改めて依頼

七・一 九州文化史研究所規定を一部届けて来た。

七・一三 日田文書々写完了 箱島分

七・一四 対馬文書の筆写にかゝる

「江戸年寄中々之来状以頭書及返答候写」 箱島

七・々 長沼文庫の本 六三一―六三八迄十二冊、及地図類、文科事ム室へ届来る、以上にて全部完了

七・二八 圖書貸出簿近頃見当らず僉議中

八・三 木 七月十一日送付返却の対馬文書（三品）受取の旨久保山益城氏より葉書来る

当時の借用証見当らず氏の葉書を以て受取の証とされたしとの旨記されている、

八・八 七月一四日筆写にかゝる文書終了 箱島

八・九日 ○口上之覚 須川万右衛門尚明云々

（万松院文書） 一冊借用証ニ記入モレ之由

東大史料編纂所員田中健夫氏⁽¹⁹⁾より話

八・三 一 八・二九（火） 宗家文書（朝鮮御和好之次第并御領所御願之控） 本日筆写畢 箱島

八・二九 火

日田広瀬家文書 二三冊

作道氏⁽²⁰⁾に托し送届返済

但「覚、二通の内一通不明（七八枚位か？）

調査の上返答すべき事

備考「借用証は精査引合の上戻すとのこと」

一〇・三日

島原市桜町大隅一郎氏より森先生借用の古文書二冊、

（安東弥右衛門高麗日記一、
文化五年

諳厄^{エキリス}利亜船渡来一件一、

右借用証一通（控あり）發送

竹内先生依頼

一一・七

栗田名古屋大学教授が視察にみえた⁽²¹⁾

一二・一

竹内教授より依頼の巻物書写にかゝる

四

森教授依頼 秀次書 軸物模写

一二・七

森教授より島井文書の書写を急にする様話あり

八

土曜午後五時迄執務

（昭和）
二六年

二六・一・一六

拡大鏡大一ヶ購入受取 牧氏より

三角定規一、尺竹一、同前
九州経済調査協会野田太郎氏来所²²⁾

九州旧藩地域図写シ

一五日

野田氏(同前)来所

英人ビースリー氏視察の為来所⁽²³⁾

国史学講演ノタメ来学ノ序視察

注

(1) 「九州大学九州文化史研究所規定」『九州文化史研究所紀要』第一号(九州大学九州文化史研究所、一九五一年三月)一四四頁。

(2) 前掲注1「九州大学九州文化史研究所規定」。九州文化史研究所は法文経済学部本館地階〇一九番室に置かれていた。

(3) 秀村選三「梁山泊「九州文化史研究所」——師友回想——」『九州文化史研究所紀要』第四八号(九州大学九州文化史研究所、二〇〇五年)六頁。なお「服藤弘司教授略歴」によれば服藤は一九五二(昭和二七)年一〇月に九州文化史研究所研究員となっている(「服藤弘司教授略歴」『法学』四八・六(東北大学法学会、一九八五年)。

(4) 前掲注1「九州文化史研究所紀要」第一号の表紙見返しに「本輯に載せた六編の論文は何れも文部省人文科学研究費の補助金により昭和二十五年四月二十五日より同年五月七日に至る間執筆者共同で対馬の調査をした結果に基づく」とある。

(5) 『九州大学五十年史 通史』(九州大学創立五十周年記念会、一九六七年)五六四頁。

(6) 戦後、直面する民間史料の散逸を防ぐために文部省が全国的に実施した近世庶民史料調査については、『近世庶民史料所在目録』第一輯・第二輯・第三輯(日本学術振興会、一九五二・一九五四・一九五五年)に調査の経緯と成果の報

九州文化史研究所『事務記録』(昭和二十五年度)の紹介

九州文化史研究所『事務記録』（昭和二十五年度）の紹介

告がある。また近年、宮間純一氏によつて近世庶民史料調査委員会の業務にも関わる「文部省史料館」の日記が紹介（宮間純一「文部省史料館黎明期の古文書整理業務——「日誌」の紹介——」『中央大学政策文化総合研究所年報』第二五号中央大学、二〇二一年）されるなど、戦後の史料保存運動を捉え直そうとする研究の機運がおこりつつある。なお、九州地区における調査概要については梶嶋政司「九州大学と資料保存運動——戦後70年から近世庶民史料調査目録原本を読み直す——」『九州大学附属図書館付設記録資料館ニューズレター』一〇（九州大学附属図書館付設記録資料館、二〇一六年）を参照されたい。

- (7) 井上忠（一九一五—二〇〇二）カ。日本思想史を専門とする井上の一九五〇年頃までの略歴は次の通りである。一九三八（昭和一三）年三月九州帝国大学法学部国史科卒業、同年四月九州文化史研究所事務嘱託（翌年三月まで）。福岡県立豊津中学校教諭、九州帝国大学法学部国史研究室副手、戸畑九州専門学校講師、同大学院特別研究生、西南学院高校教諭を経て、一九四九（昭和二四）年より西南学院大学講師（井上忠教授略歴・著作目録）『福岡大学人文論叢』一六—四（通巻六三）（福岡大学総合研究所、一九八五年）一七一—九頁。

- (8) 宮本又次（一九〇七—一九九一）、日本経済史。一九三二（昭和六）年京都帝国大学経済学部卒業、同助手、同大学院、彦根高等商業学校を経て、一九四二（昭和一七）年九州帝国大学法学部助教授、四五年（昭和二〇）同教授。五一年（昭和二六）大阪大学法経学部教授。九州文化史研究所における宮本の活動については、宮本又次『私の研究遍歴』（大原新生社、一九七八年）二二三—二四四頁。

- (9) 森克己（一九〇三—一九八二）、日本史。一九二九（昭和四）年東京帝国大学文学部国史学科卒業、史料編纂官・建国大学助教授などを経て、一九四七（昭和二二）年九州帝国大学法学部教授。一九五二年（昭和二七）横浜市立大学文学部教授。森の九大時代における史料採訪については、森克己『史苑逍遙』（森克己著作選集 第五卷）（国書刊行会、一九七六年）に散見することができる。

- (10) 安藤精一（一九二二—二〇一八）、日本経済史。一九四七（昭和二二）年九州帝国大学法学部卒業、一九五〇（昭和二五）年九月二九日九州大学大学院特別研究生後期退学、同月三〇日和歌山大学経済学部講師（安藤精一先生略年譜・著書論文目録）『地方史研究の諸視角』（国書刊行会、一九八二年）三頁。

- (11) 北條義堯。経済学部研究室雇（昭和二十四年五月 九州大学職員録（九州大学庶務課、一九四九年一〇月）一三三頁）。

(12) 箱島保五郎。法学部研究室雇（『昭和二十四年五月 九州大学職員録』一二九頁）。

(13) 秀村選三（一九二二—二〇二一）、日本経済史。一九四二（昭和一七）年京都帝国大学経済学部入学、翌一九四三（昭和一八）年海軍に召集、一九四五年（昭和二〇）年九月復員、一〇月復学、翌一九四六（昭和二一）年四月九州帝国大学法文学部経済科へ転入学。翌々一九四七（昭和二二）年九月卒業、同年一〇月九州大学大学院特別研究生、一九五一（昭和二六）年九州大学経済学部助教授、一九六六（昭和四一）年教授（『秀村選三教授略歴』『経済学研究』四九（九州大学経済学会、一九八四年）。秀村の九州文化史研究所における活動については前掲注3「梁山泊「九州文化史研究所」——師友回想——」に詳しい。

(14) 竹内理三（一九〇七—一九九七）、日本史。一九三〇（昭和五）年東京帝国大学文学部国史学科卒業、東京大学史料編纂官を経て一九四八（昭和二三）年九州大学法文学部教授、翌一九四九（昭和二四）年同大文学部教授、一九五九（昭和三四）年東京大学史料編纂所教授。

(15) 長沼賢海（一八八三—一九八〇）、日本史。一九〇七（明治四〇）年東京帝国大学文科大学卒業、東京府立第一中学校教諭、広島高等師範学校教授などを経て一九二四（大正一三）年九州帝国大学法文学部教授、一九四三（昭和一八）年同大定年退官。九州文化史研究所の設立に尽力した。「長沼文庫」は、長沼が東京帝国大学の学生時代以来筆写して集めた写本史料を一九四九（昭和二四）年三月に九州大学が購入したものであり、九州文化史研究所が所蔵した。「長沼文庫」は一九五六（昭和三一）年に目録が刊行された（『九州文化史研究所古文書目録』一）。

(16) 吉田道也（一九二一—一九九二）、西洋法制史。一九三七（昭和一二）年東京帝国大学法学部法律学科卒業、大学院進学、同大助手を経て、一九四七（昭和二二）年九州大学法文学部講師、翌一九四八（昭和二三）年同助教授、一九五〇（昭和二五）年教授。故金田平一郎法学部教授の跡をうけて、近世天草石本家の共同研究に参画するなど九州文化史研究所の調査研究に関与した。

(17) 檜垣元吉（一九〇六—一九八八）、日本史。一九三五（昭和一〇）年九州帝国大学法文学部卒業、同大助手などを経て一九四九（昭和二四）年九州大学文学部助教授兼九州大学第一分校助教授。

(18) 服藤弘司（一九二一—二〇〇五）、日本法制史。一九四六（昭和二二）年九州帝国大学法文学部法律学科卒業、同学部副手などを経て一九四七（昭和二二）年大学院特別研究生、一九五三（昭和二八）年金沢大学法文学部助教授（『服藤

九州文化史研究所『事務記録』（昭和二十五年度）の紹介

- (19) 弘司教授略歴「『法学』四八一六（東北大学法学会、一九八五年）。田中健夫（一九二三―二〇〇九）、日本史。一九四五（昭和二〇）年東京帝国大学文学部卒業、一九四九（昭和二四）年東京大学史料編纂所入所、一九七一（昭和四六）年同所教授。
- (20) 作道洋太郎（一九二三―二〇〇五）、日本経済史。一九四七（昭和二二）年九月九州帝国大学法文学部経済科卒業、松山経済専門学校教授を経て一九四八（昭和二三）年九州大学大学院特別研究生。のち大阪大学教授。
- (21) 栗田元次（一八九〇―一九五五）、日本史。一九一四（大正三）年東京帝国大学文科大学卒業、広島文理科大学教授などを経て、名古屋大学教養部教授。
- (22) 九州経済調査協会調査部（『九州経済調査協会5年史』（財団法人九州経済調査協会、一九五二年）一〇二・一〇四頁）
- (23) William G. Beasley（一九一九―二〇〇六）、東アジア史・日英関係史研究者。訪日の回数は多かった（W・G・ビーリー著、杉山伸也訳『日本帝国主義』（岩波書店、一九九〇年）三〇四頁）。

本稿は、JSPS 科研費21K01107 および JSPS 科研費20K20503による研究成果の一部である。